紹介　故前田利治氏旧蔵『猿蓑』坤巻一冊

長島　弘明

平成二十三年六月、前田操子氏より『猿蓑』坤巻一冊が東京大学国文学研究室に寄贈された。御夫君で著名な俳諧研究者であった故前田利治氏の遺愛の本で、世に前田本『猿蓑』として知られる善本である。前田利治氏の御息女小作元子氏の御夫君である小作寛氏が、渡部泰明教授と高校の同級生であった御縁で、貴重な本が本研究室に入ることとなった。御寄贈くださった前田操子氏、御仲介をお取りいただいた小作元子氏、小作寛氏、渡部泰明教授に心より御礼申し上げる。

「俳諧の古今集」（許六『宇陀法師』）と言われる『猿蓑』には後版・後印は多いが、現存する元禄版本の初印本はきわめて数少ない。所在が確認できる本としては、沖森文庫本（乾坤二冊、洒竹文庫旧蔵）・故雲英末雄氏旧蔵本（乾坤取り合わせ本二冊、乾巻は吉田澄夫氏旧蔵本）・柿衛文庫本（乾巻一冊）と、この前田本（坤巻一冊）が知られるのみである。坤巻（すなわち下巻）に限って言えば、題簽まで完備するのは沖森文庫本とこの前田本の二つのみ。つまりこの濃紺色の表紙を持つ前田本は、薄茶色表紙の沖森文庫本と並んで『猿蓑』坤巻の最善本と称してよい。この前田本坤巻は、すでに前田利治氏自身の詳細な解説を附して、勉誠社文庫2『猿蓑』（昭和50年、勉誠社）として影印刊行されている（乾巻の底本は柿衛文庫本）。また、新日本古典文学大系70『芭蕉七部集』（平成2年、岩波書店）の『猿蓑』坤巻の底本もこの前田本である。

『猿蓑』の諸版と、この前田本の書誌的な特徴に関しては、右の勉誠社文庫『猿蓑』の解説に詳しいが、例の「市中は」

歌仙の第三「二番草取りも果さす穂に出て」の初句「二番草」の「二」も、版木の欠損のため後印のものの多くが「一」となってしまったり、さらにその後の覆刻版であまり芳しくない「二」の字に彫り直されているのと比較して、鮮やかな文字・印面である。なお、『猿蓑』の諸版の詳細については、加藤定彦「七部集の書誌」（前掲新日本古典文学大系『芭蕉七部集』所収）参照。また、この前田本と同種の初印本である故雲英末雄氏旧蔵本は、雲英末雄・佐藤勝明『影印本　元禄版　猿蓑』（平成5年、新典社）に影印があり、初印本の特徴を見るための参考になる。

以下、前田本『猿蓑』の書誌を掲げる。

書型　半紙本。（乾坤二冊のうち）坤巻一冊。

表紙　濃紺色無地。二二・四センチ×一六・一センチ。

題簽　中央上方に白色無地無辺「さるみの　坤」。

内題　「猿蓑集巻之五」「猿蓑集巻之六」。

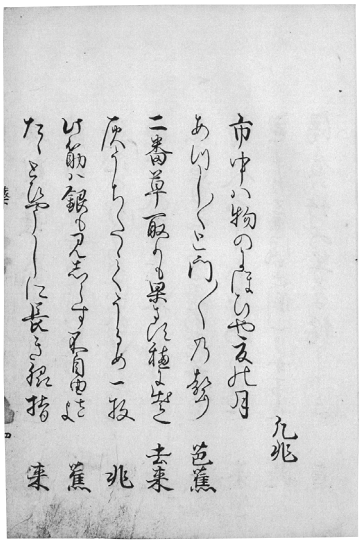
柱刻　「猿下　一（～廿四終）」。

丁数　二十四丁。

跋　「風狂野衲／丈艸漢書／正竹書之」。

刊記　「京寺町二条上ル丁／井筒屋庄兵衛板」（第24丁表末尾）。

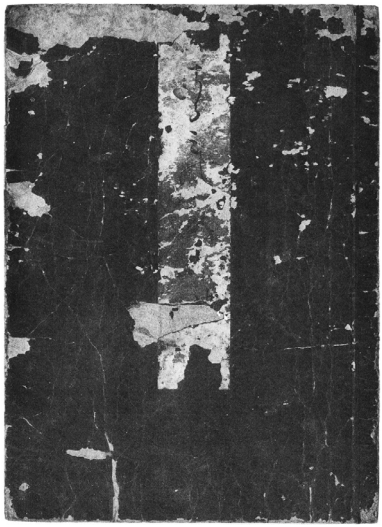
印記　「東叟印」（朱文、第1丁表右下）。



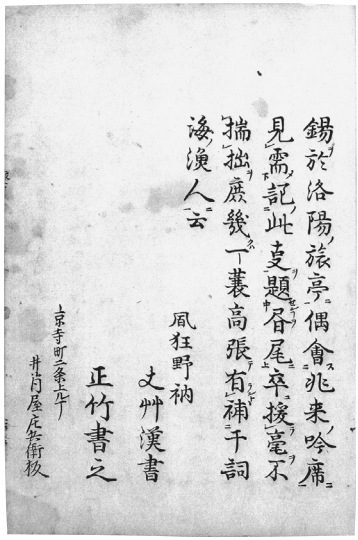
九兆

市中ハ物のほしや玄北月
あいしくと門〳〵乃秀　芭蕉
二番草取りも果て種よ空　去来
庚ちちくくくくあ一枝　兆
ひ筋ハ銀もたんたんす青田さよ　蕉
たくと草〳〵に長き拐指　来

同　第4丁表



前田本『猿蓑』坤巻



錫於洛陽旅亭偶會兆来吟席
見需記此支題昏尾卒接毫不
揣拙庶幾一裘高張有補于詞
海澳人云

風狂野衲
文州漢書
正竹書之

京寺町二条上ル
井筒屋庄兵衛板

同　最終丁表